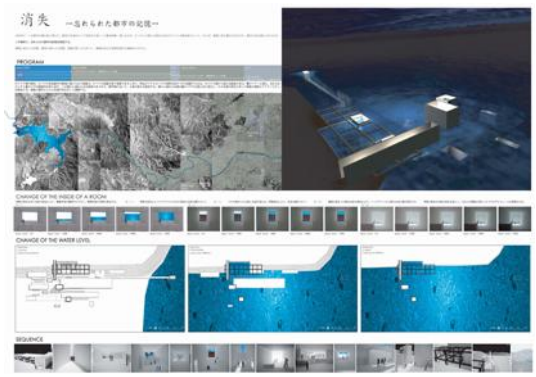
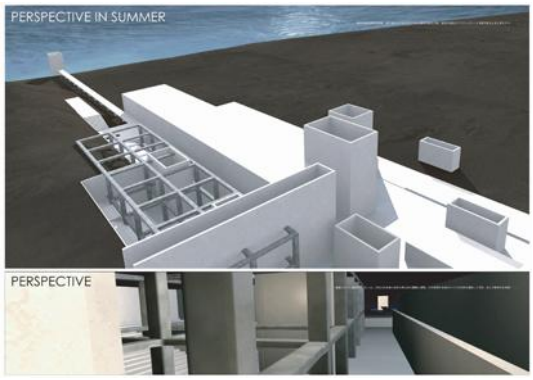
金賞　東海林孝男君

北海道大学工学部建築都市学科　　消失－忘れられた都市の記憶－

長い間、建築という産物は時には人々を守り不用になれば破壊され、社会のニーズに、ある意味で答えてきた。しかし、その死生自体が境位にある。経済との連関により、社会の潮位により建築を不用物に変値させてしまう。この「消失」という作品はある種の社会学的な抽象作品でもある。水没した炭坑都市とダムとの水位による変数との相対性。人の流れの変位とマチと現在の地上とを結ぶ形態や用途が多変する装置との相対性。全てが論理的に展開されている。決して環境を無理矢理外界と遮断し、建築を弄んだものではないことは理解できる。無限と有限の狭間に漂流するこれらの粒子は記憶と共に生き続けるであろう。想像すればする程になんと美しいことだろうか。これは唯一建築を残存させる未来とを結ぶ索条なのかもしれない。

（文責：中山 眞琴君）